

さいほうとうしゅう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

第十四回

19章

諭吉旋風

文久元年（一八六一）

大災害や大老暗殺などで安政から改元した万延は、一年と少々で早々に改元され、万延二年三月が、文久元年（一八六一）となった。

この年、幕府直轄の施設となっていた江戸の種痘所は、名称を「西洋医学所」に改め、漢方の「医学館」と並び称される官立医学校となった。

その頃、適塾では、生きのいい若駒が活躍していた。四年前に入塾した吉雄卓弥は、長崎通詞の名家・吉雄家の養子となった優等生だ。「咸宜園」で鍛えた漢詩の腕前は一流で、医学も堺の叔父の元で鍛えられたという即戦力で、洪庵の代診も勤めるほどだ。

後に彼は洪庵の四女、八千代と結婚して緒方拙斎と名乗り、緒

方家を継ぐことになる。

緒方家にも大きな動きがあった。春、平三と別れて大野に残っていた四郎が、長崎のポンペの元で修学するため、大坂に戻ってきた。

ポンペが日本に滞在するのは、残り一年しかないので急いだ方がいい、という兄の平三からの強い勧めがあったのだ。

幼かった四郎も元服を済ませ、立派な青年になっていた。

四郎は洪庵に、大野藩での伊藤慎蔵の苦境を伝えた。

「藩の情勢が変わり、慎蔵先生は肩身の狭い思いをされているんだよ。藩主の土井利忠さまは、蝦夷地開発は日本にとって重要なことだとおっしゃるけど、藩の偉い人たちは、蝦夷地の経営は金食い虫で、お足が出て行くばかりで利をもたらさない、なんて言う。でもお殿さまには文句を言えないから、お気に入り慎蔵先生に^{ほじさき}矛先を向けているんだよ。『明倫館』は評判がよくて、あちこちの藩から蘭学希望者が殺到^{さつと}してるから、古株の藩士には^{めざわ}目障りみたい。でも蝦夷地を守ることは、米国と開国交渉をするのと同じくらい大切なことなんだって」

四郎の口を通じて、伊藤慎蔵の鬱屈^{うつく}が伝わってきた。

二年間、慎蔵の薫陶^{くんとう}を受けた四郎は、蘭学よりオロシア方面に興味を持っているようにも見えた。そんな三男の成長ぶりを、洪

庵は目を細めて眺めた。

久々の大坂に一カ月滞在した四郎は、家族との再会を懐かしむ間もなく足早に長崎へ旅立って行った。

四郎が大野藩校を去ったのは、大きな流れに乗ったものでもあった。

この頃、慎蔵は古株の藩士に白眼視はくがんしされていた。

藩の重臣で藩主のお気に入りだった中山良休なかやまのりよしゅうが主導しゅどうした藩政改革は、藩の莫大ばくだいな借金を解消しつつあったが、蝦夷地開発に伴ともなう出資により、新たな赤字が生まれていた。新造船の大野丸も、守旧派から見れば凶体ばかりがでかくて、役に立たない金食い虫にしか見えなかった。

慎蔵を取り巻く状況は、四郎が語ったよりも深刻だった。慎蔵の後をつけて、隙すきあらば斬りつけてやる、という攘夷派じやういの刺客の気配すら感じられたのだ。身に危険を覚えた慎蔵はここにいた至って、ついに大野藩を辞去して大坂に戻るといふ決断をした。

慎蔵には忸怩じくじたる思いがあった。当時、適塾生は全国各地で大いに活躍していた。

江戸では、咸臨丸かんりんまるの渡米に潜り込んだ福沢諭吉ゆきちが帰国後、英語塾を開いた。そして幕府の外国方に任じられ、外交文書の翻訳に従事じゆうじしていた。

諭吉にやや遅れて村田蔵六も二年ほど、横浜の名医と名高いへボンの元で英語を修学した。

聞けば、諭吉が英語を学ぼうとした時、適塾の先輩の蔵六のところに誘いに来たという。ところが諭吉の、目上を目上とも思わないぞんざいな口の利き方に蔵六が臍へそを曲げ、その時は断ったという。両方の人柄を知る慎蔵は、いかにもありそうな話だと微笑みを禁じ得なかった。

蔵六は「講武所」の教授も務めていたが、幕府の職を辞め長州藩士となり、萩で設立された藩校の兵学科で教授になるという。そんな同窓の活躍を耳にするにつけ、大野藩を去ることにした。慎蔵には、無念の思いが湧き上がる。大野藩は慎蔵に、捨て扶ぶちを与えてくれた。中山良休の心遣いはいかがたかった。

慎蔵は大坂に戻って一念発起いちねんほつき、新たな展開を考えていた。

ところが直後、身内の不幸に襲われた。もともと蒲柳ほりゆうの質だった愛妻のお鹿しかが、大野藩での緊張した生活の疲れもあって急な病やまいに罹りかか、幼い娘と共に亡くなってしまったのだ。

慎蔵は失意に打ちひしがれた。幼子の長男を抱えて、先のごとが全く考えられない。

彼はすっかりやる気をなくした。周囲の者たちは心配したが、どうにもならない。

とりあえずお鹿の遺骨を納めるため、彼女の故郷の名塩なじおに行つた。

そこで億川百記は慎蔵に、親類の娘を後添のちぞえに紹介した。

ほどなく慎蔵は、一回り若い二十四歳の時子ときこと結婚した。

だが慎蔵に取り憑ついた不運は、なおも続く。今度は大坂に出た

時子はいびようが肺病に罹ひつてしまった。

療養のため名塩に戻ると、新妻と八歳の次男も肺炎で、相次あいついで世を去った。

喪もに服した慎蔵の悲しみは計り知れなかった。

大野藩の頃に鬱屈だんしゆから、断酒の誓いを破やぶっていた慎蔵は酒に溺れた。

だがそんな慎蔵の力を惜しむ者が名塩にいた。適塾に在籍後、名塩に帰ゆみった弓場ゆみば為政である。

彼は慎蔵が塾頭だった頃の塾生で、慎蔵が名塩に来てくれたことを喜び、慎蔵を頭取とする蘭学塾を名塩に設立するため、自ら奔走ほんそうした。その熱意にほだされた慎蔵は翌年正月、名塩に蘭学塾を開くことにした。

不運と悲しみに燻くすぶっていた慎蔵に、柔らかな春の陽射ひざしが差し掛けていた。

その頃、蘭学界では、大きな出来事があった。

あんせい
安政六年（一八五九）七月、日本の開国に伴いともな国外追放処分を解かれた、六十三歳のシーボルトが、三十年ぶりに再来日したのである。

シーボルトは長男アレキサンダーを連れて、貿易会社顧問として長崎を訪れた。

にのみやけいさく どうざま
二宮敬作は銅座町で開業して到着を待ち、そのぎ其扇とイネ、イネの娘タカと共に師を迎えた。この時、父と再会を果たしたイネは三十二才、一人前の産婦人科医になっていた。

おい みせしゅうぞう
敬作の甥の三瀬周三は、シーボルトの通訳とアレキサンダーの日本語の家庭教師を務め、後にシーボルトの孫、イネの娘タカと結婚する。

まんえん
シーボルトは、翌万延元年（一八六〇）夏まで、ぶぎよう おか長崎奉行・岡部駿河守が提供した、ほんれんじ いちじょういん本蓮寺の一乗院に滞在した。

なるたき
だがその後、鳴滝の屋敷を買い戻し、そこに移った。

翌春、シーボルトは幕府の顧問として招かれ、江戸に移った。

げんぼく とつかせい
それは、今や奥医師となっていた元鳴滝塾生の伊東玄朴、戸塚静海、たけうちげんどう しようち竹内玄同らによる招致だった。

江戸ではシーボルトは、医術、科学を教え、外交や貿易について意見を述べた。彼は外交上で遣欧使節派遣を進言するなど、けんおうしせつはけん遣欧使節派遣を進行するなど、

様々な分野において相談役を果たした。

おおつきしゆんさい

げんたく

りようほ

みやげこんさい

どうかい

大槻俊斎、大槻玄沢、松本良甫、三宅良斎、林洞海、戸塚静

海などの蘭学者も彼に修学した。

だがシーボルトは長く医業から離れていた上、医学の最先端を教えてくれるポンペがいたため、彼に学ぶことはなくなっていた。それでも念願の再来日を果たしたシーボルトの周囲には穏やかな時が流れていた。

けれども、そんな幸せな日々は、長くは続かなかった。もともと大の親日家のシーボルトは、幕府の外交顧問を務め、日本の利になる仕事をしたい、という希望を持っていた。ところが幕府はこの頃、外国領事が次々に繰り出す無理難題に右往左往していて、シーボルトの厚意を汲み取ることができなかった。

幕府を悩ませた問題を相談すれば、有意義な助言をもらえたことは間違いない。だが、幕府とシーボルトをつなぐ役人がいなかったのはお互いにとって不幸だった。

一方で、シーボルトの厚遇こうぐうを嫉ねたんだ蘭総領事の反感を招き、文久元年九月、シーボルトは幕府相談役の職を解任されてしまう。半年にも満たない蜜月みつげつだった。

失意のシーボルトは十二月、長崎に戻り、翌年三月に帰国した。

長男アレキサンダーは英国公使館付の日本語特別通訳官とし

て、残留した。

帰国後、シーボルトは外交代表として再び日本に行きたいと、何度も願い出たが許されず、慶応二年（一八六六）九月十日、ミ
けいおう
ユンヘンで死去した。

シーボルトは死の間際まで、日本に恋い焦がれていたという。
まぎわ

*

万延元年、手狭てげまになった大坂除痘館は、適塾の南の尼崎町に
あまがさきちよう
移転した。

たちまち一年が過ぎ、官許かんきよとなった種痘所の経営は安定していた。
万延という年号は一年で終わる運命だった。翌年が、もともと
改元が予定されていた年だったからだ。だが安政という年号は、
大地震や大老暗殺など、あまりにも験げんが悪いことが続いたため、
たった一年だが無理に改元したのだった。

そうして万延が一年過ぎた年明けに、予定通り改元して文久元
年とした。

その頃になると適塾も円熟期えんじゆくきを迎えていた。それは裏を返せ
ば組織として黄金期を過ぎたということでもある。福沢諭吉と長
なが
与専齋よせんさいという、適塾の二枚看板が相次いで去って久しい。

二年前の安政五年（一八五八）、江戸に出た諭吉は、築地鉄砲なかつ洲の中津藩中屋敷に、長屋を一軒与えられ、蘭学塾を開いた。この「一小家塾」が、今日の慶應義塾大学の起源である。

翌年、開港直後の横浜に行った諭吉は、オランダ語ではなく英語の看板ばかりだったことに驚き、蘭学に見切りをつけ英学に転身した。

もうひとりの俊才・長与専斎は、諭吉を追って江戸に行き来と言うのを洪庵が止めた。

「諭吉の江戸行きを止めなかったのは、英学の時代が来ると思っただからだ。だが諭吉とは違い、医学を本道とする専斎は今、江戸に行き日本流の『蘭方治療』を習っても得るところは少ない。長崎のポンペ殿の伝習は『蘭学一変の時節到来』で千載一遇のチャンスだ。江戸で時を無駄にせず、一刻も早く長崎に行き、ポンペ殿に師事した方がよい」

そして次男・平二と一緒に長崎に連れて行ってもらおうと頼んだ。自分がかつて長崎留学した時、師・中天游の遺児、中耕助を同伴したことを思い出す。

あの時は、血が沸き立つような思いを抱いた。

今、自分がああの時の年齢だったなら、諭吉のように横浜へ行き、英学を学んだかもしれない。だが洪庵には、その意欲は湧いてこ

なかった。時の流れの速さと共に、老いを感じる。

平三からは、興奮を隠しきれない手紙が、頻繁ひんぱんに届いた。

——ポンペ先生は平易なオランダ語で、薬物や器具など実物を見せながら説明してくれるので、適塾のように難解な文章を解読する努力は必要ありません。ここでは辞書は机上の飾り物と化し、日々の講義を理解し記憶すれば、新しい知識が身についてくるのです。

平三が安易な道に流れる傾向があるのを、洪庵は心配していた。実際、専齋からは全く異なる私信が届いた。

——学問の平易なるにつけ、刻苦錬磨こつくれんまの必要少なく、したがって怠慢放逸たいまんほういつの弊を生じ、学生の中には往々その業ごうを遂げざるもの出で来たりぬ。深く危惧きぐするものなり。

語学力は、いかに単語を正確に覚えるかが鍵だ。語彙ごいが貧弱では高度な学力は身につかない。

そのため長与専齋は私塾を開き、「適塾風の論講ろんこう（会読）」を復活させたという。

ただし専齋の手紙は元塾頭らしく、洪庵への気遣いきづかも見え隠れした。

だから平三の文の方が、実情に近かったのだろう。

平三に関しては、別の心配事もあった。どうも丸山まるやまの花街に入

り浸^{びた}っているらしい。

そのことを知^{やえ}った八重は当然、おかんむりになった。だが、洪庵は苦笑するしかない。

——長崎医学所の頭取は、あの泰然^{たいぜん}殿のご子息の良順^{りょうじゆん}殿。さも
ありなん、だな。

洪庵は、そこで自分の例を引いて説教をするようなことは、し
なかつた。自分が頑^{かたく}なに丸山を避けたのは、心に花香^{はなか}の面影^{おもかげ}が
あつたからだ。だが平三には、そんな存在はないのだろう。
ならば仕方がないではないか。

このように適塾の双璧二人は東西で活躍していたが、本家本元
の適塾の活力は、目に見えて落ちていた。

実は適塾の最盛期は、福沢・長与という二大巨頭が退塾した時
に終わっていた。

それは、世が蘭学から英学へ移行しつつあることの現れでもあ
つたのである。

*

六月、沈滞^{ちんたい}気味の適塾が突然、活気づいた。

「たのもう」という、聞き慣れた声に、適塾生たちが玄関に向かう。

真つ黒に日焼けしたぼろぼろの羽織袴はおりばかまで、旅装の男性が土間に立っていた。

「諭吉先生、いつお戻りになったのですか」「米国はいかがでした」「咸臨丸は無事、太平洋を渡れたのですか」「木村撰津守せつつのかみの差配はいかがでした」

塾生たちが興奮するのも当然だった。玄関に立っていたのは昨年二月、幕府の遣米使節団の一員として咸臨丸で渡米を果たし、昨年十一月に帰国した福沢諭吉だった。

「待て待て、皆の衆、そう急せくな。まずは洪庵先生へのご挨拶が先だ」

怒濤どとうの質問を笑顔で制し、諭吉は洪庵の書斎に入っていった。書見台の前で読書をしていた、洪庵は相好そうこうを崩した。

「おお、元氣そうだな、諭吉」

橋本左内さない亡き後、洪庵は諭吉を自分の意志の継承者だと思っていた。その愛弟子まなでしが一回り大きくなって適塾を訪問してきたのは心強く、また嬉しいものだった。

諭吉は師匠の前でも臆おくさず、どかりと腰を下ろす。そしてお茶を運んできた八重を見上げて、小さな包みを手渡した。

「これは、おっ母かさんへのメリケン土産です。あちらの髪飾りですわ」

「あら、嬉しいこと」と八重は娘のようにはしゃいだ声を出す。
「私には土産はないのかな」と洪庵が言う。

「もちろん、ございますよ。米国で見聞きしてきた、採れたてはやはやの実情を、真つ先^はに先生にお伝えしようと思ひ、こうして馳^はせ参じたのです」

その軽やかさが、洪庵には眩しい。洪庵は微笑して言う。

「それはありがたい。ならば私だけでなく、塾生にも聞かせてもらおうか」

「かしこまりました。では二階の大部屋でお話ししましょう。ご足^{そくろ}労、お願いします」

書齋の外で耳を澄ませていた大勢の塾生が、わつと歓声を上げた。どたどたと急な階段を駆け上る音、座布団^{ざぶとん}を用意せよ、茶だ、菓子だ、と騒がしい中、洪庵は立ち上がる。

「どれ、元塾頭・福沢諭吉殿の凱旋報告^{がいせん}を伺^{うかが}うとするか」

諭吉は、適塾生の聴衆^{ちようしゆう}の顔をぐるりと見回す。どの顔も緊張している。

「米国の話をする前に、渡米前までに俺がなぜ英学^{くわが}に鞍替^{くらが}えしたか、話そう。開港直後の横浜に行つて衝撃を受けた。オランダ語には多少自信があつたが、看板の文字がひとかけらもわからん。

聞けば全部、英語だというじゃねえか。こりやまずいと思ったね。鎖国時に日本貿易を独占していたオランダは、ポルトガルを駆逐し『東インド』を侵略して香料貿易を独占し、海上帝国を築いた。だが黄金時代は十九世紀始めのナポレオン戦争のち、英国に海上覇権を奪われて、終わっちゃった。そして一八四〇年の阿片戦争以降、英国は香港を拠点に勢力拡大を図った。日本と世界を結んだ国際語オランダ語に英語が取って代わったわけだ」

「それじゃあ今、俺たちが学んでいる蘭語は、時代遅れになってしまったんですか？」と若い適塾生が、不安げに訊ねる。

「そんなことはない。オランダ語と英語は似ている。むしろ英語の方が、構造は単純だ。だからオランダ語の基礎があれば、英語の修得は早いから、無駄にはならん。だが十年もしたら蘭学は時代遅れになるかもしれんが」

場が、一瞬、しん、と静まり返る。洪庵が咳払いをして言う。
「怖れることはない。新しい学問が必要になったら、ためらわず学べばいいのだ。実は私も、英語を学びたいと思っているのだ」
「適塾でも英語が学べるようになるのですか」

不安と期待が交じった声で塾生が訊ねると、洪庵は首を縦に振る。

「いずれはそうしたいと思っている。それにはまず辞書を手に入

れなければならんな」

「俺は米国で『ウエブスター辞書』と『華英通語』を官費で買ったてきましたぜ。日本で一番乗りです。『ゾーフ・ハルマ』みたいに塾生に書写させればいいんですよ。福沢塾で歓迎しますよ」

諭吉が得意満面で言うと、洪庵は微笑してうなづく。

「ありがとう。だがすでに江戸の箕作秋坪に『ボムホフ英蘭対訳辞書』とピカードの『ポケット英蘭辞書』をお願いしてあるんだ。代金の金十四両（現在の百万円相当）を送り済みだから、間もなく届くだらう」

「さすが洪庵先生、慧眼です」

「私が慧眼ならば、諭吉はその上を行くわけか」

「そりゃあそうですよ。俺は今や、先生より一步先の、『英学の達人』なんですから」

座がどつと湧く。

「鉄砲洲の中津藩中屋敷の福沢塾のことを教えてくださいよ」

塾生にせがまれた諭吉は、滔々と福沢塾の現状を描写した。

「いいともさ。開塾にあたり中津藩の中屋敷の長屋を一棟借り受けたんだが、これが驚くべきお宝ものでな。八十八年前に杉田玄白先生や前野良沢先生が『ターヘル・アナトミア』の翻訳を始めた、蘭医学の濫觴の地だったわけよ。これも洪庵先生のお導

きだと思っただぜ」

「ほう、前野良沢先生の居宅とは、奇縁きえんだな」という洪庵の相づちに、諭吉はうなずいた。

「ところがご縁はそれだけじゃなく、古本屋を物色かしていたら、杉田玄白先生の『蘭学事始ことばじめ』を、偶然見つけましてね。俺は前野先生の話はよく知らなかったんですが、それを読んで同じ中津藩の先輩の偉業を知りまして。こりゃあ世に広めねばならねえ、と思っただ次第です」

「温故知新おんこちしんは、学問を修める上で一番大切な姿勢だ。先達のご苦労を広めるため、諭吉の舌先三寸したのひばいさんすんに期待してるよ」

師である洪庵の言葉を聞いて、照れくさそうに頭を掻かいた諭吉は言う。

「やだなあ、俺を口舌こうぜつの輩やからみたいな言い方をして。まあ洪庵先生に言われるのは仕方ねえや」

それからぐるりと塾生を見回した。

「さて、由緒正ゆいしよしいものの長屋は手狭で、下の六畳じよ畳には畳たたみが三枚しかないから、そのうち二枚を俺が使い、一枚を塾頭に使わせているんだ」

「適塾方式ですね」と塾生が茶々を入れる。

「まさしくその通り。適塾から連れていった岡本周吉しめうきちも元気だ

よ。まだ人数は少ないが、いずれ『西の適塾、東の福沢塾』と呼ばせてみせよう」

ならば俺も行くかな、という声に混じり、議事進行係の塾生が言う。

「では福沢先生、そろそろ本編の『福沢師は如何にして渡米を果たすや』という本題にお入りください」

諭吉は鷹揚にうなずいた。

がつてん

「合点承知した。安政六年暮れ、遣米使節団が自前の軍艦、咸臨丸で渡米するという噂が流れた。俺は八方手を尽くし、船長で軍

はつぼうて

艦奉行の木村撰津守に頼み込んだ。幸い木村殿の妹婿は蘭医で

いもうとむしこ

洪庵先生と兄弟弟子の桂川甫周先生だったので、

あつせん

幹旋をお願

いしたら、快く引き受けてくれた。二十二日間の航海は大荒れで、

ふなぞこ

みんな船底で吐いてたな。口だけは勇ましい自称艦長の旗本の勝

はたもと

りんたろう

麟太郎ってのが、一番酷い船酔いをしたのは笑えたな。俺は米国

で、写真館の娘と一緒に写真を撮り、みんなに羨ましがられた。

うらやま

アイスクリームという氷菓子も美味かったな」

塾生たちは、まだ見ぬ西洋の甘味を想像して、ごくりと唾を飲む。諭吉は続けた。

つば

「五十日間滞在したサンフランシスコは、見るもの聞くもの全てが驚きだった。米国では家柄は関係ない。江戸の將軍職は代々、

徳川家が世襲せしゅうするが、アメリカ合衆国を建国したワシントンの子孫は、政権内におらず、幕閣ぼくかくにあたる者は、市民の入れ札で平等に選ばれる。そんな話に度肝どぎまを抜かれて帰国したら、いつの間にか安政が終わって万延になっていたんで驚いた。けど左内ちゆうさいを誅殺ちゆうさつした井伊大老が水戸浪士に斬殺されたと聞いて祝杯を上げたまんだよ。洋行ようこうは苦労も多かったけれども、その分、いいことも沢山あった。こんな俺が今、帰国後には幕府の外国方に雇われ、翻訳の仕事をしているんだぜ。諸君も何としても外国を見に行くべきだ」

塾生たちは目を爛々らんらんと輝かせ、食い入るようにして諭吉の話を聞いている。こうした熱気は、最近の適塾では失われていたものだ。底抜けの行動力と、それに裏付けされた起爆剤のような言葉こそ諭吉の真骨頂しんこつちようであり、全盛期の適塾を体現した精神だった。諭吉なき後の適塾には、諭吉に取って代わろうという気概ある塾生が出てこなかった。

これでは、適塾が腑抜ふぬけてしまうのもさもありなんだと、洪庵は寂しく思った。

講談後、書齋で洪庵と夕食を共にしながら、洪庵が言う。

「諭吉は本当に立派になったものだ。私も師匠として、鼻が高い

よ」

「いやあ、後輩の前では散々ふかし、若干見栄をはりましたが、俺なんぞまだまだです。それより洪庵先生に、是非ともお伝えしなければならぬことがあります。江戸の種痘所を官立にしようという動きがあり、それに伴い伊東玄朴殿が種痘所を『西洋医学所』に改組しようとしています。そんな組織が出来た暁あかつきには、是非とも先生に頭取になっていただきたいのです」

「そんな大それた役は、荷が重い。私はお城務めは真まつ平御免なんだ。それにそのような役柄なら、初代頭取になるのは玄朴殿が相応ふさわしいだろう」

「おっしゃる通りなのでしようが、だからこそ心配なのです。確かに玄朴殿は、現在の蘭医学が興隆こうりゅうした土台を作り上げた実力者で、あの方なくして、江戸の種痘館は立ち上がらなかつたでしょう。でも玄朴殿は私利私欲に走るきらいがあります。玄朴殿が法印ほういんになられた経緯はお聞きになりましたか？」

「詳しくは知らないな」

諭吉は咳払いをして居住まいを正すと、扇子を手に講談をうなる調子で声を張り上げる。

「時は安政五年は文ふみの月、江戸の街角を往診の駕籠かごで駆け巡る玄朴殿を捕縛したのが若年寄遠藤但馬守の用人ようじんでお城からの使い。

城内に連れ込まれ家定侯いえさだこうご病氣にてお脈拝見あひと相なった。將軍の病氣を診る者は幕臣ばくしんなりと大老が即決し、玄朴殿は奥医師に任じられたのである」

そこまで浪曲風ろうきょくふうに歌うと、諭吉はそこで言葉を切って、師匠の顔を見つめた。

「……と、これは玄朴殿の下僕げぼくがあちこちでいい触ふらしている口上くじょうです。今や玄朴殿は幕府の医師の最高位でもある法印となるわ、豪壮ごうそうな家屋敷を新築するわ、蘭医の奥医師の総取締そうしとく訳として束ねるわ、とまあ、飛ぶ鳥を落とす勢いです」

洪庵は苦笑して言う。

「どうも、その口上には誇張こちやうがありそうだね。もともと遠藤但馬守と玄朴殿は旧知の間柄で、『蘭医書の禁』を事実上ほご反古にしたお仲間だよ。漢方医が將軍の治療をできない様子を見かねた遠藤但馬守が、玄朴殿を強引に引っ張り出したのだな。井伊大老が奥医師に任じるなど、前もって幕閣の間で手筈てはずを整えておかなければ不可能だからね。西洋嫌いの井伊大老が受け入れたくらいだから、玄朴殿の評判は高かったのだろう」

そう言った洪庵は、更に続けた。

「しかし、玄朴殿は灰汁あくが強いが、清廉せいれんな我が師・坪井信道先生が生涯信頼され、最後の脈も取られたお方だから、立派な医者に

「違う」

「しかし今や玄朴殿は、奥医師の任命権を一手に握り、養子だけでなく、実力がない手先まで奥医師にする始末です。まるで蘭学の仇敵きゆうてき、かつての漢方の多紀家の如き振る舞いです。俺は、そんな権力の我利我利亡者ではなく、洪庵先生のような、清廉潔白むしで無私な人に、蘭方医を束ねていただきたいのです」

「それは、お褒めの言葉として受け取っておくよ。だが私は浪速なにわに骨を埋めるつもりだ。それにお城勤めの大変さは先年、ここに立ち寄られた松本良順殿から、たつぷりと聞かされた。良順殿にも言われたが、私は宮仕えには向いていないんだよ」

「俺は諦めませんからね。今の適塾は、洪庵先生にもたれかかり、自分の足で立つという気概がない者が多い気がします。でも江戸には、やる気がある者たちばかり、今の先生が教導すべき人材がいる地ですよ」

それはまさしく今、洪庵自身が感じていることと、ぴったり重なっていた。

その晩、諭吉は大部屋に泊まり、夜更けまで語り明かした。

久々に適塾まんじゅうに万燈ばんとうの蝋燭ろうそくが点る。

一瞬、適塾に昔の熱風が蘇った。

諭吉の言葉が、塾生たちに火を点けたのだ。

福沢諭吉とは、火薬庫の導火線のような男だったのである。

翌年十月、「幕府種痘所」は「西洋医学所」と改称した。

玄朴は取締役に就いたが、諭吉の予想とは反し、自らは頭取にはならず、初代頭取に大槻俊斎を推した。

俊斎は、お玉ヶ池種痘所たまがいけの設立に尽力した功労者であり、人徳もあり、庶民の医療に尽くすなど、「東の洪庵」のような無私な人物だった。なので、妥当な人選だったといえるだろう。

20章 あしのかりね

文久二年（一八六二）

文久二年（一八六二）二月。公武合体策で和宮降嫁が成された。

それは朝廷と徳川家の融和を図り、幕府を延命させる弥縫策だった。

これで外国を排斥する攘夷を主張する朝廷と、開国に舵を切らざるを得ない幕府の軋轢は酷くなった。攘夷の薩摩藩や長州藩の浪士が京を闊歩し始めた。

そんな文久二年の春、洪庵は穏やかな日々を過ごしていた。

四月から六月初めの二カ月間、洪庵は塾生二人を供に連れて、中国・四国地方を旅行した。

母の米寿祝いが目的だったが、西国を旅するのは洪庵の長年の夢であり、この機会しかない、と思い切ったのである。

四月二十一日、母のお祝いを心づくしの品で行ない孝養を尽くした後、洪庵は中国・四国地方をのんびり漫遊した。道中、各地の適塾卒業生が行く先々で歓待してくれた。全国に散った弟子たちの、現在の活躍振りを聞くと、洪庵は生き返る心地がした。

ところがその長旅の道中、江戸から思いもしない悲報が届いた。

西洋医学所の頭取に就任した大槻俊齋が、おおつきしゅんさい着任わずか半年で病死してしまつたのである。

大槻俊齋は「ばんしや蚕社の獄」に連座して五十日の入牢にゆうろうをしていた。そのため終生、身体に不具合を抱えていたといわれる。

そんな俊齋の後任として白羽の矢が立つたのが誰あるう、洪庵だつた。

実はそうした打診は年明けに既にされていた。

洪庵を推挙したのは医学所取締の伊東玄朴げんぼくと取締補の林洞海はやしどうかい、そして大槻俊齋自身だ。

だが洪庵は招請しょうせいを固辞こじした。自分にそのような大役は務まらないこと、病弱故ゆえに大坂を離れたくないと縷々るる書き綴りつづ、なんとか最初の打診は回避した。

ところが初代頭取の大槻俊齋が急死したため、要請は切羽詰まつたものになつた。

それにしても、生臭い政医の顔を持つ伊東玄朴が選んだのが、彼とは真逆の、清廉で高潔な大槻俊齋や洪庵だつたということは、なかなか興味深いことである。

もつともそれは洪庵には、ありがた迷惑な話だつたのではあるが。文久二年、京と大坂は激動していた。

朝廷の要請に応じた薩摩藩新藩主、島津久光しまづひさみつが千名を超える藩

兵を率いて上洛した。

すわ倒幕かと思われたが、久光は建議で朝廷を動かし、その命を伝える勅使と共に江戸に行き、幕府に要求を押しつけることで矛を収めた。

これを受け幕府は、一橋慶喜を將軍後見職に、松平春嶽を政事総裁職に任じた。

ここで、かつて橋本左内が構想した人事が、ついに成就した。だが残念ながら福井藩の好機は去っていた。

なにより、誰よりも信頼を置いた右腕であり智恵袋でもあった左内を失った春嶽は、生彩を欠いていた。

京に倒幕攘夷を目指す志士が蝟集し、七月、天誅と称する暗殺事件が始まった。

殺罰とした大暗殺時代の幕が開いたのである。

*

洪庵の趣味は広がった。だが囲碁などは、自他共に認める下手の横好きだった。勝負にこだわらず、碁を打ちながら相手と話をすることを楽しんでいた風がある。

洪庵が本当に愛した趣味は和歌だった。

和歌の師匠は岡山出身の国学者で、甥の藤井高雅たかづねに紹介された萩原広道はぎわらひろみちである。

萩原は本居宣長もとのおりのながに傾注けいちゆうし、「源氏物語評釈ひようしやく」を執筆しているという才人だった。

嘉永四年かえい（一八五二）の正月から、洪庵は適塾で五歳下の萩原広道に、源氏物語を講義してもらっている。

記憶力抜群の儒学者・広瀬旭莊ひろせぎよくせうも親友だった。洪庵は蘭学者ながら、個人的には儒学者との交流も深かった。篠崎小竹しのざきしょうちく、内藤数馬かずまなど歌仲間も多く、コレラ騒動で多忙を極めた嘉永六年（一八五三）にも、十七回も歌会を催している。

大坂城の在番ざいばんを務めた旗本の久貝因幡守正典はたもと くがいのなほのかみまさのりもまた、古典に通じた風流人で親しかった。

久貝は、「講武所こうぶしょ」の初代奉行はつだいへいぎょうに就任し、洪庵が江戸に上った頃は側御用取次そばごようとりつぎを務めていた実力者でもある。

このように蘭学者として名を馳せた洪庵の精神の骨格は、当時の王道だった漢学においても造詣ぞうけいが深かったといえるだろう。いかにも洪庵らしい、素直で伸びやかに心情を歌った一首が残っている。

わがうゑし 若木の梅は 咲きにけり

さかり見るべき 春やいく春

洪庵は梅を愛した。花といえばふつつ桜だが、洪庵には、花といえど梅の花だった。

「歌は風流人を気取っているだけだ。和歌の腕は、花香の方が上だよ」

洪庵はいつもそう言い、「花陰」と号することもあった。

花香の陰で歌う、という気持ちを表したようだ。

その八重は、嫁いでから、和歌を詠むことがなくなっていた。「章さんの歌を読むことが、あての楽しみになったんです」と人に打ち明けている。

ただ、八重は手紙を書くのは大好きで、親類や知人に多数の手紙を残している。

それらの文には、自分の気持ちだけでなく、世相への的確な把握と批判があつたりして、洪庵のよき相談役だったことを感じさせる。

和歌は達者といえない洪庵だが、文章はわかりやすい名文を書いた。洪庵の翻訳は独特で師の坪井信道は「緻密にして放胆なり」と評した。「緻密」とは原書の内容を論理的に細部まで理解していることで、「放胆」とは逐語訳にこだわらず、意識をしてみせ

ることだ。

「扶氏医戒」を訳した杉田成卿せいけいとの訳の違いを比べれば一目瞭然だ。

杉田成卿の訳は文語体で格調高く、逐語訳に近く正確さを目指した。

一方、洪庵の訳は語りかけるような口語で、意識に近い。

もともと洪庵は、自分の文才のなさを痛切に感じていた。幼い頃、藩校が途中でお取り潰しになったこともあり、漢籍の修学がきちんとできていない、という引け目もあった。

だから代表作の「病学通論」は、師・坪井信道との間での江戸と大坂の往復書簡しよかんを重ねて、幾度も校閲・加筆してもらっている。

推敲すいこうすること実に七十八回、と坪井信道は、著作に寄せた前書きで記している。

そんな洪庵は、優れた師の薫陶くんとうと、たゆまない研鑽けんざんにより、文章の達人になっていた。

原書を熟読し、内容を頭の中で完全に消化した上で、日本語の文章に組み立て、一読しただけでわかるように表現した。難解な文章も、俗文ぞくぶんで判りやすく、すらすらと訳した。

入塾早々、塾頭を務めた福沢諭吉は、蘭語には相当自信を持っていたが、洪庵の素読そどくを聞き、とても敵わないとシャツポを脱い

でいる。

後に諭吉は、万民にわかる平易な文章でベストセラーを連発するが、そこには洪庵の薫陶があったことは間違いないだろう。

後に洪庵は自分の人生を振り返って、こう語っている。

——武家に生長し、武を辞して文に入る。はじめ漢学に従い、漢を辞して蘭に入る。蘭書読み難く、勤苦食を忘れ、東西に師を追う。奥秘独り得たり。

まさに過不足なく洪庵の人生を凝縮した、端正な名文である。医家としての洪庵は、蘭医を名乗りながらも、実際の治療は和洋折衷に近かった。

当時の蘭医としては、標準的なスタイルでもある。

治療の中心は悪血を抜く「瀉血（＝刺絡）」や水蛭吸血法を主とした。

他に胃の内容物を吐かせる「吐剤」や「亜芙蓉」を好んで併用した。

蘭医としては西洋薬を用い、「セメンシナ」という虫くだしや

「ウルユス」と呼ばれる大黄が主成分の便秘薬を頻用した。

天游の妻・さだ直伝の、漢方に西洋薬を併用する折衷派が洪庵の医術だった。

蘭医学は主に外科中心に伸張したので、外科を嫌った洪庵とし

ては当然の成り行きだった。

西国の長旅から戻り、一息ついたある夜、洪庵は八重を川縁かわべりの散歩に誘った。

大きな満月の、白々とした光がちらちらと川面かわもに揺れている。

久しぶりに二人きりで過ごす時間に、八重の心はときめいた。

懐ふところ 手で背を丸め、洪庵はそろそろと歩く。八重が心配そうな顔で、隣を歩く。

昨夏から持病のリウマチ、胸痛、咳がひどくなり、全身が衰弱していた。九月半ばには全身がむくみ、危篤状態きとくになりかけたが、一カ月の転地療養てんちりようようでなんとか回復した。

今春の西国旅行も転地療養を兼ねていて、体力は少し戻ったばかりだった。

柳の木の下で立ち止まると、洪庵は八重を見た。

「八重、お前には苦勞を掛け通しだった。長年連れ添って、私に言いたいことや不満もあるだろう。今宵はそれを思う存分聞かせてもらおうかと思うのだが」

うつむいて、水面に映る満月が揺れるのを見遣った八重は、首を横に振る。

「苦勞なんてあらしまへん。章さんと一緒に過ごすことができた

八重は幸せ者です」

「そうかもしれないが、不満のひとつくらいはあるだろう」

八重はうつむいて考える。夫が散歩に誘うことも珍しければ、こんなことをしんみり言うなんて初めてのことだ。一体どうしたのだろう、と思いつつ、答える。

「そうですね、あるとしたら、幼い平三と四郎を、親元から離れたことくらいです」

「あれは、最終的には二人が決めたことだ」

「けど、女親としては辛いものでした。あとは子どもたちの名前が付け方かしら。生まれた順に数を名前につけるなんて変、と思ってました。そのせいで三男なのに四郎になってまうし」

「そうかもしれんが、幼い頃は番号を振るのが一等わかりやすいからな」

そう言って立ち止まった洪庵は、目を閉じて子どもたちの名前を口にする。

「最初の子は長女の多賀^{たか}だったな。十歳で亡くした時は、ひどく悲しい思いをした。第二子の長男の整之輔^{せいのみすけ}は二歳で亡くなったから、あまり実感はなかった」

「女親は年に関係なく、子どもに死なれるのは身を切るように辛いものどす。けど、いくらなんでも、男の子と女の子を一緒に並

べて番号をつけるのは、おかしくありませんか」

洪庵は照れ笑いを浮かべてうなずく。

「確かに今思えばおかしいことだったかも知れぬ。だが平三で生まれた順番の名前をつけてから、すすく育つようになったから、縁起を担いだというのもある。それに加えて、私はおなごも男子と同じように、世に出るべきだ、と思っていたのだ。第三子の平三は次男なのに三の文字をつけたのは、私が三平と名乗った時期があり、それにあやかした。病弱な私が、この年まで生き長らえることができたから、三の文字は縁起がよいと思ったのだ。だが翌々年に生まれた三男は第四子なので四郎としたら、よそに男の子がいるんですか、と怪訝に思われてしまったものだよ」

八重はふふ、と微笑する。それから真顔で言った。

「思えば五番目の子は、名もつけずに葬ってしまったのが今も心残りでした。六番目の次女の小睦もふたつで亡くなりました。あの頃が一番しんどかったです」

「大所帯になった適塾が、過書町に引っ越した頃だな。あまりの忙しさに弔いも片手間になり、可哀想なことをした。八重も気持ちの整理をつけられず、さぞ辛かっただろう」

洪庵は腕組みをして瞑目した。

「へえ、でもその後は七番目で三女の七重、八番目で四女の八千

代、第九番目で五女の九重と、三人の娘を授かり、みな元気に育っております。七重が少し病弱なのが気になりますけど」

「あの娘は物語を読むのが好きなようだ。この間は『源氏物語』について一緒に話したよ」

「そうですか。あの娘はあてにはそんなこと、ひとかけらも言いません。しまへんけどなあ」

すると洪庵は嬉しそうに微笑んだ。

「私には時々、源氏物語の語句の解釈を聞いてくるよ。私が萩原はぎわらひろみち先生の講釈を聞いていたせいだろうな。広道先生の講釈を、障子の影からこっそり聞いていたこともあったらしい」

「そんならええんですけど」

ほっとした口調で八重がそう言うと、洪庵は続けた。

「その後は十番目で五男の十郎、十一番目で六女の十重と順調に続いたな。しかし、六男の収しゅうじろう二郎は十二番目だから、さすがに名付けには少々苦労させられたよ」

「収二郎だから十二郎だなんて、こじつけがすぎますこと。でも同じように名付けで苦労した十三番目の七男、重じゅうざぶろう二郎は安政五年生まれで、今年でもう四つになります」

「貧乏人の子だくさん、とはよく言ったものだ。子育ては、八重ばかりに苦労を掛けたな。塾生にも我が子のように接してくれた。

八重に救われた者も多いだろう」

「塾生さんはみんな素直ないい子で、苦勞はあらしまへんでした。それと子どもたちは、父さんがよう面倒を見てくれました。あのお手伝いがなければどうなったことやら」

「そうだな。長崎留学の費用の工面から始まり、適塾や除痘館の立ち上げなど、しゅうとせいの舅殿には世話になりっぱなしだ。私の短慮で平三と四郎を勘当した時、七十の身で雪の深山を越えて二人を訪ねてくれたのは、感謝しかない。こうなったら百まで生きてもらわんとな」

そしてぽつんと呟くように言う。

「天游先生は五十三才、信道先生は五十四才で亡くなった。私も五十三、先生たちと同じ年頃になった。そろそろ頃合いだろう」
八重は思わず、洪庵をにらんだ。

「縁起でもないこと、言わんといってください。夜の散歩にお誘いになったり、こんな風に昔のことをお話しになるなんて、いつもの章さんと違います。何か悩んではるのですか」

洪庵は腕組みをして瞑目めいもくしていた。やがて目を開いて八重を見た。

「実は先日、江戸の西洋医学所の頭取職に就くように、という要請があつたのだ」

「そのお話は以前、お断りになったのでは」

「あの時と、事情が変わったのだ。頭取の大槻俊斎殿が突然亡くなり、江戸の玄朴殿から何としても、と頼み込まれてしまったのだ」

「それで、章さんは江戸に行かはおつもりなんですか」

「実は迷っている。お前も知つての通り、私の身体は、ガタが来ている。江戸に行ったら、生きて戻れぬやもしれぬ。それに私にお城勤めが務まるとも思えぬ。八重はどう思う？ 私は江戸に行った方がよいのか、それとも大坂に残った方がよいか」

「そんなことをあてに聞きはるなんて、章さんらしくありません。あての答えは、聞かずともおわかりのはず。江戸に行こうと、大坂に残ろうと、あては章さんについていくだけです」

洪庵を見つめる、八重の大きな瞳が、月の光に濡れている。初めて言葉を交わした夜と、少しも変わらぬ瞳の色だった。

「つまり、自分で決める、ということだな」

「へえ。けど章さんのお気持ちは、とうに決まっておられるのでしょうか？」

「お前の言う通りだ。私は行くしかない。だが怖いのだ。私が積み上げてきたものが崩れ落ち、すべてを失なってしまうようで」

そう言って洪庵はうつむく。

八重は胸に手を当て目を瞑り、深く息を吸う。

そして凜とした声で言い放つ。

「洪庵先生というお人は、これまでも、これからも、たくさんの人に必要とされるお方です。そして、必要とされる処へは迷わず駆けつける先生です。今、江戸に呼ばれたのは、お江戸がご病気なのでしよう。ならば洪庵先生は行かなければならないではありませんか」

洪庵の目の光が蘇る。

「お前の言う通りだ。こんなことで怖じ気づいていたら、わが父に、そして志半ばで倒れた左内に、合わせる顔がない」

藩が作った借財（かひくさい）を一身に背負い、文句も愚痴も言わず淡々と返済し続けた挙げ句、身をすり減らして死んでいった父なら、今の自分を叱責したに違いない。また、自分を常に死地（しち）において、主君のために奔走した左内は、洪庵を情けなく思うだろう。

洪庵は天を仰ぎ、大きく息を吐いた。そして静かに微笑した。

「医道のため、子孫のため、討ち死に覚悟で、江戸に参ることにするか」

うつむいた八重は、洪庵の袖をそつと引く。

「ほんとは、あては章さんと、ずっと大坂で暮らしていたんです。けど、けど……」

震える八重の肩を抱いて、洪庵は言う。

「もう大丈夫だ。私はわがままでだから、お前を江戸に呼び寄せる。その時は来てくれるな？」

八重は何も言わずに、洪庵の胸の中で何度もうなずいた。

満月が二人を静かに照らしていた。

翌日、上府の要請を受諾する返事を出した洪庵は、長崎留学中だった平三と四郎を大阪に呼び戻した。二人は、取るものも取りあえず長崎を発ち、大坂に向かう。

さすがに江戸に本拠地を移すとなると、準備に時間が掛かった。江戸の西洋医学所で自分がやることは、適塾と変わらないだろう。すると、適塾で使っている教材や教科書を持参する必要がある。

同時に適塾での修学も滞とまりないよう、手配しなければならぬ。門下生の吉雄卓弥を養子にして緒方拙斎と名乗らせ、大坂の適塾を任せることにした。

平三と四郎が大坂に着いた翌日、拙斎は洪庵の四女・八千代と仮祝言を挙げた。

義理の息子になった拙斎に、洪庵は言う。

「無理に適塾を維持する必要はないからね。私も二十年以上かけ

て、ここを築いた。一朝一夕で同じことを成し遂げることはできない。学塾を豊んで医業に専念するのによし。そうしたことを含めて、お前の判断に任せる。思うようにやればよい」

弟子の風が抜けない拙齋は、「そうならぬよう、努めます」と言つて深々と頭を下げる。すると洪庵は首を横に振った。

「違ふのだ。今や英学に取つて代わられ、蘭学は時代遅れになりつつある。だから今、蘭語の語学学校である適塾が凋落するちようらくのは自然の流れであり、我々がどんなに力を尽くしても、変えることはできないのだ。それに適塾は、私のものではない。塾生こそが適塾であり、中身によつて変貌する。ここに集まる塾生は、時代の風に吹かれてやってくるのだから。そのことだけはきちんと伝えておきたいのだ」

そう言うと、洪庵はにっこり笑う。

「それと、私には新たな夢ができた。頭取になる『西洋医学所』は、官許の種痘所に医院と学塾を併設したものだ。江戸の種痘所設立は、大坂除痘館に遅れること七年。官許になったのも大坂の二年後なのにあつという間に権威となり、大阪は追い抜かれてしまった。これが幕府の威光なのだ。私は大坂除痘館を、江戸の『西洋医学所』のようにしたい。そのために拙齋には浪速で頑張ってもらいたい」

師は、自分を対等に扱ってくれている上、行く末まで案じてくれているのだと、拙齋は胸が熱くなった。そして同時に、肩の荷が軽くなった。

八月六日、洪庵は千々に乱れる胸中を吐露したような一首を残し、塾生を何人か共に引き連れて、慌ただしく大坂を発った。

寄る辺とぞ 思ひしものを 難波潟 葦のかりねと なりにけるかな

骨を埋めるものと思っていた浪速が「あしのかりね」となってしまいそうだ、という歌は、洪庵が二度と浪速に戻れないだろう、という予感を漂わせる、切ない歌となった。

長崎から急遽戻った平三と四郎は、父の出立を見送った。その後、二人の道は分かれた。

平三は長崎のポンペの元へ戻り、医学の修学を続けた。そして四郎は父の後を追って江戸に行き、英学を学ぶことにした。

文久二年、適塾も緒方家も、時代のうねりの中で大きな転換点を迎えようとしていた。